©トミタユキコ　近藤写真©HARU

北九州芸術劇場プロデュース

《不思議の国のアリスの》

帽子屋さんのお茶の会

小劇場から中劇場へ―究極の不思議ワールドが一期一会の復活!

取材・文：重岡美千代

今、この誌面をご覧の方の中には、9月に市内某所で行われたダンスフラッシュモブ「アリスモブ」を見て、「あれは何だ?!」と興味を持った方もいるかも知れない。

そもそもの始まりは、昨年2月に小劇場で行われたリーディングセッションだった。シリーズ第21弾「《不思議の国のアリスの》帽子屋さんのお茶の会」を手がけたのは、コンテンポラリーダンス界の異彩、近藤良平氏。初の演劇作品演出となった。

「脚本は、1984年に〝円〟こどもステージのために書き下ろされたもの。ナンセンスの宝庫《アリス》の世界で遊ぶ別役氏の奇妙にズレていく言葉が印象的で、そこに前回、2人1役のダンス的身体表現が加わることで可笑しみが倍加した。近藤さんは、別役ワールドの本質を本能的にバッと掴んでいる。すごいですね」と能祖将夫プロデューサー。言葉と動きが、抜きつ抜かれつ、ズレたり合致したり。大好評を博した舞台がさらにバージョンアップし、北九州芸術劇場プロデュース作品として再登場するのだから見逃せない。しかも今回、近藤氏は舞台美術も担当し、ダンサーとして舞台にも上がる。そこに九州を代表する個性派役者20名と、前回同様ストライク・吉田トオル氏による生演奏が加われば、いったいどんな爆発が起こるのか。北九州では1ステージのみ。一期一会の究極のライブは、もう目前だ。

INTERVIEW

近藤良平氏 インタビュー

言葉が身体が、飛び出す絵本的世界に!

別役戯曲×近藤良平　終わりなき面白さ

昨年のリーディングセッションを振り返っていかがですか?

近藤　最初に能祖さんにお声がけいただいた時には、「リーディング」という意味そのものも分からないくらいだったんですよ、実は。「給食って何?」って聞くくらいおかしな話だけど。そんな僕でも知ってる別役実さんを能祖さんが題材として提案してくれて。読んでみたら、文そのものがダンスっぽいし、今の自分に非常にフィットしてたんです。いろんなことが動き出した感があったのは、オーディションの時。こちらが発する言葉に合わせて自由に動いてもらうマイムテストをやっている時に、ものすごく面白くなっちゃって。たとえば「りんご」と言えば、その形を手で表現する人や食べる動作をする人も居て。どれが良い悪いではなくて、しゃべらずに身体だけで表現している方がより饒舌に見えた。必死で何かを訴えようとしている感じが面白いと思ったんです。

1人が台本片手にセリフを読み、もう1人はしゃべらずに身体で表現するという2人1役スタイルが見事にはまった前回。今回は?

近藤　前回、2人ワンセットにしてみると、意外と稽古がやりやすかったのが1つ（笑）。たとえばアリスが2人向かい合って、ああでもないこうでもないと考えている。もうその絵自体が面白くて仕方なかった。今回もその部分は変えないし、リーディングから発生している要素も残したい。ただし小劇場では実際に手にした脚本を読んでるスタイルだったけど、今回は壁とか机とか人の背中とか、いろんな所に脚本が書いてあるようなイメージを持ってます。舞台美術も前回はアリス的な森の中の雰囲気だったんですが、今回は中劇場という空間の拡がりがあるので、飛び出す絵本的というか、もう少しニュートラルな印象。登場人物もほとんど同じだけど、僕がダンサーとして出ます。僕は物語の中の人ではなくて、その場所の管理人みたいな役割かな。音楽は今回も吉田トオルさん。コンドルズのバンドプロジェクト「ストライク」で一緒にやってるから、気心も知れているし信頼度も抜群です。トオルさん自身、あの一気に創り上げていく即興性が楽しかったみたいで、この再演が決まった時点からもうやる気満々。

PROFILE

近藤良平　こんどう・りょうへい

ダンサー・振付家。学ラン姿でダンス、映像、コントなどを展開するダンス・カンパニー、コンドルズ主宰。コンドルズは世界30カ国以上で公演。NHK「サラリーマンNEO」、「からだであそぼ」内「こんどうさんちのたいそう」、連続テレビ小説「てっぱん」オープニング振付出演。第四回朝日舞台芸術賞寺山修司賞受賞。三池崇史監督「ヤッターマン」、宮崎あおい主演「星の王子さま」などの振付も担当。野田秀樹演出、NODA・MAP「THE BEE」で役者デビュー、映画「ブタがいた教室」などにも出演!収容人員5万人の味の素スタジアムで開催された東京スポーツ国体2013開会式式典演技総演出担当。桜美林大学、立教大学などで非常勤講師としてダンスの指導にあたる。南米育ち。愛犬家。

INTERVIEW

今度こそ角打ちに行きたい、という思いもあるようだけど（笑）。

九州の俳優や街の印象はいかがですか？

近藤　九州の俳優さんたちは、素直で健全で、自分の向かうべき所に向き合ってる感じ。僕的には「すげー気持ちいい奴ら」という印象かな。意外と飲みに付き合ってくれるし、街には角打ちがあるし。昭和っぽくていいよね。僕は子どもの頃南米で育ったこともあって、スペインやポルトガルなどラテン系の国々が大好き。結構足を運んでるんだけど、お店の前でサルディーニャ（鰯）焼いてたり、真っ昼間からワイン飲んだり。北九州の角打ち文化って、ラテンのそういう感じに似てる気がする。立ち食いでも、立ち飲みでもなく、お店の前に置いたビールケースを適当に使ったりして。そういうのが南米の匂いがして、いいんだよね。人物で言えば、北九州って高倉健さん。こうスクッと立って遠くを見たくなる。そういうイメージ。

動物的
プリミティブな動きが、人間の面白みに感じて。

近藤さんにとってダンスとは？

近藤　ダンスを始めたのは、20歳くらいで遅かったんだけど、それでも25年くらい踊ってるからね。もっと回りたいとか、もっと高くとか、格好つけようと思ってた時期もあったけど、最近はダンスや芝居が動物園の猿山的に見えてきたんです。僕を含めて（笑）。中学時代は動物観察にはまってたんですけど、猿って嬉しいとワーッとなるし、悔しいとダンダン足踏みするし、衝動的じゃないですか。ダンスって基本プリミティブなものだから、それでいいんじゃないかと。たとえば日常で売り子さんが決まりきったセリフと動きを繰り返しているのもダンスっぽく見えるし、すごく面白い。人間って変な動物だな、と思いながら観察してしまうんです。

キャストの方が「近藤さんは面白がりの天才」と言っていましたが…。

近藤　だって面白いこと以外したくないもん！といっても、その面白さをことさら人に伝えようという気もない。子どもの頃、家で一生懸命絵を描いてて、自分ではものすごくよく描けたと思ったから、それを母親に見せに行ったことがあるんです。でもその時母親は忙しかったのか、こちらが期待するような反応はしてくれなくて。僕にとっては、その絵を描いてること自体がすごく貴重な時間だったから、他の人の評価は関係ないんだなと気づくきっかけにもなった。だから大人になった今も、僕の中では失敗も成功も、正解も不正解もない。失敗というのも一つの事実で、「おー、うまく失敗しちゃったね、今日は」くらいの感じ。「じゃあ、次は成功しようよ」とも思わない。そうするとどんな状況もシンプルに面白がれるんですよね。実はね、成果発表というのも大嫌いで…。なのに本番というリミットがあって、ある程度成果を見せる必要がある舞台をやってるのは不条理かもしれないけど。「完成しました、見てください！」という意識はあまり働かせないようにしてる。僕の奥底では、本番が完成形じゃなくても途中の不完全なものでもいい。いっそ本番がなければ、ずっと続けられるのに、と思ったりするくらい（笑）。終わりがなく、その瞬間、瞬間がリアルに面白い時間。今はそういう狭間に居るような気がする。

不思議の国のキャスト陣が語ル！作品×近藤氏×北九州の不条理

帽子屋さんのお茶の会 番外編

演奏　吉田トオル（ストライク）

テンポやリズム感が心地よい別役戯曲が、リーディングとマイムで絶妙に仕上げられていくのがこの作品の魅力。実は、良平さんから「北九州にバカンスに行きませんか？」と誘われた前回。休みが皆無でリバーウォーク周辺しか散策出来なかったというナンセンス。今回はリベンジしたいと思ってます。

眠りねずみ

谷岡紗智（ぐにゃり）

使者

寺田剛史（飛ぶ劇場）

アリス

古賀今日子（che carino!/che carinal）

高野桂子（village80%）

帽子屋

村上差斗志（14+）

椎木樹人（万能グローブ ガラパゴスダイナモス）

美和哲三（14+）

通訳

脇内圭介（飛ぶ劇場）

チシャ猫

福田雅人

片山敦郎（富む平原）

三月兎

高野由紀子（演劇関係いすと校舎）

小笠原萌（だーのだんす）

美輝明希

公爵夫人

佐々恭子

市長

響金太郎

岩本将治

魔法使い

中嶋さと（14+）

立石義江

ダンサー

野中香織

百田彩乃（だーのだんす）

1役2人でパワーが2倍?!
昨年のリーディング

高野（由）　オーディションの時から楽しくて楽しくて。1役を2人でやるからパワーも2倍！わはーワクワク、でした！

佐々　えー?! 私は生まれて初めてのオーディション&舞台。マジ途中で死にかけました。

百田　セリフと身体の動き始めのタイミングが難しかった。

片山　それを同期させるか、させないかのバランスもね。

小笠原　相方は隣に居たり、舞台の遠いところに居たり。ラジコンを遠隔操作してるみたい。

谷岡　私は眠ってばかり（笑）椅子に縛られたまま歩くのを1人廊下で練習してたなぁ。

手足が長い
カリスマダンサー＝近藤良平

美和　近藤さんの「自由さ」「直観力」「楽しんでやろうとする姿勢」が素敵だった。

古賀　一緒に飲みたい！大好き！

百田　手足が長いから、動きの残像が美しくてゾクゾク！ミステリアスなオーラの中に奥深い「何か」が隠されてて、探ってるうちにいつの間にか引き込まれてる。

野中　遊びの天才。自分が楽しけりゃ、それでヨシ！みたいな。

高野（桂）　役者が出したアイデアをそのまま採用してくれて、人をその気にさせる人。

脇内　人間味のある野生男。誰もが好きになる太陽みたいな人。

美輝　誰に対しても「否定された」と感じさせないし。

福田　でもって、稽古が終わる頃にはお酒のことを考えていらっしゃいます（笑）

まちも私も、ナンセンス？

村上　この作品って全然意味がわからなかったりするけど、どこか温かいところが魅力。Don't think! Feel! みたいな。

脇内　いつの間にかくすりと笑ってしまう。

中嶋　意味は分からないけど、なぜか共感できる面白さと言えば？

響　たとえば、うどんを待つ間におはぎを食べる北九州人とか？

小笠原　小倉城の非常口マークが忍者なのとか？かわいいよね。

福田　危険物が見つかったニュースを聞いても、基本驚かない北九州人（笑）

岩本　危険な街と思われているけど、実は芸術面が充実してる。

椎木　悪そうな人とお洒落な人と、優しい人とおかしな人が狭い世界に息づいてるのがいい。

立石　モノレールが吸い込まれていく近未来的小倉駅のすぐ下に、ディープな昭和飲み屋街。

古賀　ナンセンスと言えば、きついのに飲みに行ってしまう私…。

寺田　子どもには片付けなさいと言いつつ、自分の部屋が汚い…。

高野（由）　太ってなくていい役と言われても太る努力をしちゃう…。

片山　役者なのに人前に出るのが苦手。本番嫌だなぁと思ってる。

中嶋　なのに何でやってんのかな？と思うけど、やっぱり好きなんでしょうね、お芝居が！